

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

10 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,184.25 (15 日)	1,106.30 (2 日)
国内建値(円/g)	: 4,569 (21 日)	4,322 (2 日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 119.99 (15 日)	122.14 (26 日)

10 月の海外金相場は 1 日に\$1,114.20/toz(トロイオンス)でスタート、スタート直後は軟調だったが、2 日に米雇用統計が予想よりも低調だったため米連邦準備理事会(FRB)による早期利上げ観測が後退、それにより金市場への資金流入が増加したことで、同日後場には\$1,140.75 まで急伸した。

5 日以降は、急速な上げから利益確定の売りが出て、一旦は下げたものの、週末の 9 日には、外国為替市場でドルがユーロに対して下落したことから、金に資金が入り、\$1,151.55 と約 1 か月半ぶりの高値をつけた。中東情勢の緊迫化も相場上昇を後押しした。

中旬入り後も、世界の主要中央銀行による緩和的な金融政策が続き、金市場に投資資金が流入しやすくなるとの見方から、買いが優勢となった。15 日には\$1,184.25 をつけ、約 4 か月ぶりの高値となった。この上げ基調を背景に、金の上場投資信託(ETF)にも中長期の投資資金が入る傾向が強まった。その後、一旦は反落するものの、足許での低調な米経済指標の発表が続いたこともあり、FRB による早期の利上げ観測が再び後退、それにより初旬と同じように金市場への資金流入が相次ぎ、堅調な値動きとなった。

しかし、22 日に欧州中央銀行(ECB)のドラギ総裁が記者会見で 12 月にも追加の金融緩和を決める可能性を示したことからドル高・ユーロ安が進み、翌 23 日には\$1,161.25 まで売り込まれた。ただ、月末にかけては金市場への資金流入は続くともみられる買いも入り、下げの勢いは限られた。その後 28 日には米株式相場が上昇したものの、米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明で利上げが見送られたことからドル安が進み、\$1,179.60 まで上伸した。しかし、29 日以降はドルが若干戻したことから、弱含み状態で推移、30 日には\$1,142.35 まで下げて越月した。

2. 為替相場推移

10月の為替相場は1日に\$1=120.83円(TTS相場、以下同じ)でスタート、2日に9月の米雇用統計が発表され、その結果は市場予想を下回ったが、円相場が急激な上昇をするほどのインパクトはなかった。その結果、上旬ではほぼ\$1=121円水準で動きの乏しい展開となった。

中旬入りすると、相次ぎ発表された米景気指標の内容が悪かったことで米連邦準備理事会(FRB)による年内利上げ観測が一段と後退、これを受けて、円相場は\$1=120円水準での推移となった。15日には、\$1=119.99円をつけ、8月下旬以来約1か月半ぶりの円高・ドル安水準となった。

ところが、週明けの19日以降は、米株式相場の上昇から「低リスク通貨」とされる円を売りドル買う動きが優勢となったことで、緩やかな下落基調となった。さらには、22日の欧州中央銀行(ECB)のドラギ総裁による12月の追加金融緩和を示唆する発言からドル高・ユーロ安が一気に進み、週明けの26日には\$1=122.14円と本年8月末以来の円安・ドル高水準となった。

しかしながら、27日には日経平均株価やアジアの主要株価指数が軒並み下げたことで、「低リスク通貨」とされる円に利益を確定するための買い戻しが入り、翌28日には\$1=121円水準まで円が反発した。28日には米連邦公開市場委員会(FOMC)で利上げが見送られたことから一時的にドル安が進んだものの、それによる円の反発は僅かで、月末にかけても\$1=121円水準での値動きに終始した。30日には\$1=121.90円をつけて越月した。

対ユーロでは、22日まで€1=136~137円とやや円安基調で推移したが、22日のECBのドラギ総裁の発言を受けて、一気に円が反発した。月末にかけては、€1=134円水準での値動きとなった。

【国内】

1. 建値推移

10月の国内金山元建値は1日に4,327円/g(グラム)と小安くスタートしたが、上旬から中旬にかけての海外相場の上昇により堅調に推移、4,300円台から4,400円台へ上昇すると、14日には4,500円台に到達した。

下旬でも、海外相場が堅調に推移したことから、概ね4,500円台を維持し、底堅い値動きを示した。21日には4,569円と本年7月中旬以来3か月ぶりの高値となった。ところが、月末で海外相場が急落したことから、30日には4,490円と4,500円台割れとなって越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2015年9月分=平成27年9月分)

生産 : 9,897 kg (前月比 9.6%増、前年比 13.8%増)
出荷 : 8,963 kg (前月比 2.0%減、前年比 9.5%増)
在庫 : 5,485 kg (前月比 20.5%増、前年比 36.4%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

9月の生産は前月比、前年同月比とも増。前年同月比は13か月連続の増と増加基調を保っている。出荷は円建て価格の低下にもかかわらず、前月比減となるも、前年同月比ではプラスを維持した。前年同月比は4か月連続の増。在庫は生産増が影響して大幅増。前年同月比でも3か月連続の増。在庫レベルは2012年(平成24年)9月の6,343 kg以来の高水準。

銅

【海外】

2015年10月のLME銅相場は月初の\$5,100/t水準から月半ばにかけて\$5,300圏まで上昇したが、月末にかけては再び\$5,100圏へと軟化した。

銅相場は前月末、グレンコア株価が同社の債務削減計画に対するアナリストの悲観的な見方から暴落したこと、中国の8月の工業部門企業利益が2011年の調査開始以来最大の落ち込みとなったことなどから\$5,000を割り込んだ。

10月に入ると、米国経済は8月の建設支出が2008年5月以来の高水準となった一方で、9月非農業部門雇用者数は市場予想を下回り、失業率も5.1%で横ばいであった。加えて、9月の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で米連邦準備制度理事会(FRB)は中国経済の減速や金融市場の混乱が米国のインフレ率や労働市場に与える影響を見極めるため、利上げに慎重な姿勢を示した。これを受けてドルが軟化し、ベースメタル相場を押し上げた。さらに、グレンコアが亜鉛の大規模減産計画を発表し、亜鉛相場が急伸したため、LME市場は全般的につれ高となった。

しかし、後半のベースメタル相場は中国の景気減速が失望されて反落に転じた。

中国の第3四半期GDP成長率は前年同期比6.9%と前期までの7%台を割り込み、2009年第1四半期以来の低水準となった。9月の工業生産も6か月ぶり、1~9月の固定資産投資は2000年12月以来の低い伸び率にとどまった。景気減速が鮮明となるなか、人民銀行は23日、貸出金利、預金金利を0.25%引き下げ、24日から実施した。利下げは昨年11月以降6回目。預金準備率も引き下げた。

月末にかけては米国の利上げ観測が再浮上した。FOMCは28日、政策金利を据え置いたが、9月の声明にあった「世界的な経済・金融リスク」との表現を削除し、12月の引き上げの可能性を示唆した。これを受け、翌29日のドルは対ユーロで8月以

来のドル高水準となる\$1.10割れへと上昇した。

供給障害要因としては、ミネラコジャワシは9月29日、コジャワシ銅鉱山(チリ)のSXEW操業を停止したと発表した。操業安定化計画の一環であるとともに、銅価低迷も勘案された。これにより銅カソード生産が30千t/年削減される。

コデルコは10月6日、ベントナス銅製錬所(チリ)の定修を開始した。定修期間は24日間で、この間、同製錬所は閉鎖される。精鉱処理能力は400千t/年。

ミネラチャイナルコのトロモーチョ銅鉱山(ペルー)労組は10月21日から48時間ストライキを実施した。労使交渉は継続中。

フリーポートマクモランは10月22日、市況低迷のためシェリッタ銅モリブデン鉱山(米)の生産を当面50%削減すると発表した。これにより銅生産は45千/年、モリブデン生産は4.5千t/年減少する。同社は8月にマイアミ鉱山(米)の閉鎖、タイロン鉱山(米)の採掘半減、エルアブラ鉱山(チリ)の採掘とリーチングパッドの積み上げの半減などにより68千t/年の減産を発表しており、今回の発表と合わせた減産量の合計は銅が113千/t、モリブデンは9千t/年となる。

アサルコはヘイデン銅選鉱場(米)を11月2日から無期限閉鎖する。同社は8月、同選鉱場の閉鎖と労働者211名のレイオフ計画を発表していた。労働協約更改交渉は依然継続中で、7月には双方が不当労働行為を提訴している。

一方、コデルコは10月20日、ラドミロトミッチ銅鉱山(チリ)管理職労組の12日間に及ぶストライキが収拾したと発表した。同社はこの間、緊急事態対策を発動して操業を継続した。

なお、テックのアンダコージョ銅鉱山(チリ)労組は10月7日、新労働協約案を批准し、ストライキ計画を中止した。

中国では、白銀有色金属集団は定修工事のため10月初めから閉鎖中の白銀銅製錬所の操業を10月31日に再開した。金冠銅業の銅陵銅製錬所は10月初めから実施していた定修を終え、11月初めに再開する見通し。中国では銅価格低迷により国内の銅精鉱、銅スクラップ供給が減少したため多くの銅スメルターが定修閉鎖を実施した。今年前半に定修閉鎖を実施した大手スメルターは金川有色金属(400千t/年)、銅陵金昌(180千t/年)、雲南錫業(100千t/年)、陽谷祥光(500千t/年)など。江西銅業の貴溪製錬所(1百万t/年)も9~12月に10%の減産を計画している。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2015年1~7月の世界の銅鉱石生産は前年同期比3.0%増10,974千t、地金生産は2.5%増の13,089千t、消費は1.9%減の13,081千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲563千tから+8千tへと供給不足が解消した。報告在庫は前年比29.2%増の1,485千t、在庫/消費比率は2.4週間から3.2週間に上昇した。

鉱石生産の内訳は精鉱が3.5%、SXEWが1.5%増加した。インドネシア、チリの生産回復が主因で、チリは前年、新規鉱山が稼働した。これら2か国で5.5%増加した。

ペルーは 12%増加、米国は 4%、中国は 3%減少した。地域別にはアフリカが 1.5%、南アメリカが 4%、アジアが 9%、ヨーロッパは 1.5%増加したが、北アメリカは 3%、オセアニアは 5%減少した。鉱山稼働率は 85%から 83.5%に低下した。

地金生産の内訳は一次生産が 1.5%、二次生産は 7%増加した。国別には中国が 5.5%増加したほか、フィリピンが増加、前年第 1 四半期に鉱山操業が抑制されたインドネシアも回復した。コンゴ民主共和国も 9%増加した。チリは 3%、日本は 2.5%、米国は 6%減少した。地域別にはアフリカが 8%、アジアが 6%増加、アメリカは 2%、オセアニアは 20%減少した。ヨーロッパは横ばいであった。精製工場の稼働率は 81%で横ばいとなった。

消費は中国の見掛け消費が 1%増加した。中国を除く世界の消費は 4%減少した。日本は 8%、EU は 6%減少した。昨年 9 月に輸出税を撤廃したロシアは 52%減少した。地域別にはアフリカが 1%、アジアが 0.6%増加(中国を除くアジアは 0.3%減少)、アメリカは 2%増加、EU は 12%、オセアニアは 66%減少した。

今後の需給動向については、国際銅研究会(ICSG)によれば、2015 年の世界の銅鉱石生産は 1.2%増の 18,751 千t、地金生産は 0.8%増の 22,669 千t、消費は 1.2%減の 22,628 千t、地金の需給バランスは前年の▲414 千tから+41 千tへと 5 年ぶりの供給過剰になると見込まれる。2016 年は鉱石生産が 4.2%増の 19,542 千t、地金生産が 2.3%増の 23,138 千t、消費は 3.0%増の 23,310 千t、需給バランスは▲127 千tと再び供給不足になる予想。

4 月時点では 2015 年が+360 千t、2016 年は+230 千tと予想されたが、その後、市場環境が大きく変化した。中国経済の鈍化に鑑み消費が下方修正されたが、それ以上に供給が大幅に下方修正された。

2015 年の鉱石生産は 2014 年に引き続き微増にとどまるが、2016 年は 4%台の増加となる。既存鉱山の増強、最近稼働した鉱山の立ち上げ、新規鉱山の生産開始などがその理由。2015~2016 年の増加は精鉱生産によるもので、SXEW 生産は減産計画により減少する。

2014 年の地金生産は 7%増加したが、2015 年は微増にとどまる。中国は 7%増加するが、チリ、日本、米国は減少する。一次生産(SXEW を除く)、二次生産ともに 2%増加するが、SXEW 生産は 4%減少する。2016 年は電解生産が 4%増加するが、SXEW 生産はさらに 4%減少する。

2014 年の見掛け消費は 7%増加したが、2015 年は微減となる。中国の実需は 3~4%増加(4 月の予想 4.5~5%からは下方修正)するが、見掛け消費は横ばいとどまることが主因。他方、中国以外の消費は 1.5%減少する。2016 年の見掛け消費は 3%台に回復する。中国の実需は 4%、中国以外は 2%増加する。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

10/1 670 10/13 690 10/16 680 10/21 670 10/26 680 11/2 670

2. 生産・出荷・在庫

平成 27 年(2015 年)9 月の銅地金生産は前月比 9.3%減、前年同月比 1.6%増の 120.4 千tと、前月比は 3 か月ぶりの減少、前年比は 3 か月ぶりの増加で 2 月以来の低水準となった。玉野製錬所が 9 月 9 日に転炉の火災で溶錬操業を停止したことが主因。出荷は各 1.0%減、10.6%減の 130.4 千tで前月比が 2 か月連続の減少、前年比も再び減少に転じた。内訳は内販が前月比 11.0%増、前年比 13.1%減の 71.6 千tと 5 か月連続の前年比減。輸出は各 12.6%減、7.4%減の 58.8 千tと 4 か月ぶりの前年比減。内販のうち電線向けは前年比 17.0%減の 44.2 千tと 4 か月連続の減少、伸銅品向けは 7.6%減の 23.0 千tと 5 か月連続の減少。在庫は前月比 9.2%減、前年比 2.5%増の 100.2 千tで前月比が 2 か月ぶりの減少、前年比は 3 か月ぶりの増加となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成 27 年 9 月の銅電線出荷は前月比 13.6%増、前年同月比 5.6%減の 60.4 千t(推定)と前年比は 2 か月連続の減少となった。うち内需は前年比 4.5%減の 58.5 千tで 3 か月連続の減少、輸出は 30.6%減の 1.9 千tで 6 か月連続の減少。内需の部門別には、電力が 10 か月連続、通信は 5 か月ぶりの増加となったが、電気機械は 12 か月、自動車は 7 か月、その他内需は 3 か月連続の減少で、建設電販も再び減少に転じた。

日本伸銅協会によれば、平成 27 年 9 月の伸銅品生産は前月比 16.6%増、前年同月比 8.8%減の 63.6 千t(速報)と前年比は 7 か月連続の減少となった。うち内需向けは前年比 7.3%減の 53.0 千tと 11 か月連続の減少、輸出は 16.0%減の 10.5 千tで 6 か月連続の減少。品種別には半導体、コネクタ向けの銅条が 5 か月、エアコン向けの銅管は 11 か月、自動車端子向けの黄銅条は 6 か月、コネクタ向けの青銅板条は 5 か月連続の減少となった。

鉛

【海外】

2015 年 10 月の LME 鉛相場は\$1,600/t圏でスタートし、月半ばにかけて\$1,800 台まで上昇したが、月末には\$1,700 を割り込んだ。

鉛相場は前月末にかけて弱含み推移した。グレンコア株価が同社の債務削減計画に対するアナリストの悲観的な見方から暴落したこと、中国の8月の工業部門企業利益が2011年の調査開始以来最大の落ち込みとなったことなどがその背景であった。

10月に入ると、米国経済は8月の建設支出が2008年5月以来の高水準となった一方で、9月非農業部門雇用者数は市場予想を下回り、失業率も5.1%で横ばいであった。加えて、9月の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で米連邦準備制度理事会(FRB)は利上げに慎重な姿勢を示した。これを受けてドルが軟化し、ベースメタル相場を押し上げた。

この間、9日にはグレンコアが亜鉛を500千t、鉛を100千t減産すると発表し、この日の鉛相場は\$103.5急伸した。

しかし、後半のベースメタル相場は中国の景気減速が失望されて反落に転じた。

中国の第3四半期GDP成長率は前年同期比6.9%と2009年第1四半期以来の低水準となった。9月の工業生産は6か月ぶり、1~9月の固定資産投資は2000年12月以来の低い伸び率にとどまった。景気減速が鮮明となるなか、人民銀行は23日、貸出金利、預金金利並びに預金準備率の引き下げを発表した。利下げは昨年11月以降6回目。

月末にかけては米国の利上げ観測が再浮上した。FOMCは28日、政策金利を据え置いたが、9月の声明にあった「世界的な経済・金融リスク」との表現を削除し、12月の引き上げの可能性を示唆した。これを受け、翌29日のドルは対ユーロで8月以来のドル高水準となる\$1.10割れへと上昇した。

需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015年1~8月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比3.6%減の3,071千t、地金生産は6.2%減の6,677千t、消費は6.1%減の6,663千t、地金需給バランスは前年同期の+20千tから+14千tへとほぼバランス推移している。

鉱石生産はアメリカが1.9%増加したが、ヨーロッパ、アフリカは横ばい、アジアは4.9%、オセアニアは9.9%減少した、地金生産はヨーロッパが2.1%増加したが、アフリカは横ばい、アジアは8.6%、アメリカは5.9%、オセアニアは10.0%減少した。消費はアフリカが6.0%増加したが、オセアニアは横ばい、アジアは7.7%、アメリカは5.4%、ヨーロッパは3.2%減少した。地金の報告在庫は前年同期比16.4%減の496千t、在庫/消費比率は2.7週間から2.6週間へと横ばいであった。

中国は鉱石生産が7.5%減の1,338千t、地金生産は11.9%減の2,581千t、鉛精鉱輸入は6.4%減の554千t、地金のネット輸出は13千tから30千tに増加した。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は11.5%減の2,600千tとなった。

今後の需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015年の世界の鉱石

生産は2014年に減少した後、2015年は2.5%増の4.80百万t、2016年は1.2%増の4.86百万tと予想される。2015年はオーストラリアがパルーステーション鉱山の休止とキャニントン鉱山の減産により減少する。2016年はオーストラリアのセンチュリー鉱山、アイルランドのリシーン鉱山の閉鎖による減少が中国、メキシコ、ロシアの増加により相殺される。なお、グレンコアが10月9日に発表した100千tの減産計画は加味されていない。

2015年の精製鉛生産は中国に加え、昨年、ラオロヤ製錬所が閉鎖されたペルーの減少を主因に1%減の10.83百万tと予想される。2016年は3.5%増の11.20百万tと予想される。ベルギー、中国、インド、イタリアが増加するほか、韓国はコリアジックの蔚山製錬所が間もなく完成する。生産能力は130千t/年。

2015年の精製鉛需要は前年比0.7%減の10.82百万t、2016年は2.6%増の11.11百万tと予想される。中国の需要は需要の1/3を占めるeバイクの生産と販売の減少が続いているため0.6%減少するが、2016年は自動車及び産業用バッテリー需要の増加により2.6%増加する。2015年はヨーロッパが0.8%、米国は3.6%減少する。しかし、2016年はそれぞれ3.1%、1.9%増加するほか、インド、韓国、トルコも増加する。

この結果、世界の精製鉛需給バランスは2015年がほぼバランスするが、2016年は中国以外の増加により97千tの供給過剰となる。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

9/1 263 10/1 258 10/13 274 11/2 262

10月の鉛建値はLME鉛相場に連動し月半ばに上昇したが、その後は軟調に推移した。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2015年9月分=平成27年9月分)

生産 : 15,524t (前月比 7.2%減、前年比 9.9%減)

出荷 : 16,723t (前月比 24.2%増、前年比 7.0%減)

在庫 : 28,884t (前月比 3.1%減、前年比 6.4%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

9月の生産は細倉製錬所の豪雨による生産の一時停止や小坂、竹原両製錬所の粗鉛減により前月比、前年同月比とも減。前年同月比は3か月連続の減。出荷は蓄電池向けが蓄電池メーカーの在庫調整完了により増加したことで前月比大幅増だが、前年同月比は昨年のレベルが高かったことで3か月連続の減。在庫は生産減から前月比減だが、前年同月比は37か月連続の増と依然高水準状態が続く。

3. 需要部門動向

9月の自動車生産台数は前年同月比2.6%減の828,817台となり、15か月連続で前年同月を下回った。

乗用車は前年同月比15か月連続のマイナス、トラックも同5か月連続のマイナス、バスも同3か月連続のマイナスとなった。

4～9月(年度上半期)の自動車の生産台数は4,446,586台と前年同期より7%減った。4月に軽自動車税が引き上げられたことなどから、軽乗用車が2割超のマイナスになったことが響いた。

9月の自動車輸出台数は前年同月比2.2%増の419,005台となり、2か月ぶりに前年同月を上回った。

一方、9月の二輪車生産台数は前年同月比10.7%減の45,157台と11か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、8月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,701千個(前年同月比±0%)と横這いだったが、自動車用以外の鉛蓄電池が538千個(同8%減)と大きく減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,239千個(同2%減)と3か月ぶりに低下した。

鉛関連製品生産統計

		8月	9月(速報値)
自動車	数量(台)	604,974	828,817
	前年同月比(%)	95.3	97.4
		7月	8月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,863	15,343
	前年同月比(%)	98.6	101.7

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2015年10月のLME亜鉛相場は上旬にかけて\$1,600/t台を推移したが、9日にはグレンコアの大規模減産発表がはやされ\$1,800台に急伸した。しかし、後半は反落し、月末には\$1,700を割り込んだ。

亜鉛相場は前月末、グレンコア株価が同社の債務削減計画に対するアナリストの悲観的な見方から暴落したこと、中国の8月の工業部門企業利益が2011年の調査

開始以来最大の落ち込みとなったことなどから一時\$1,600 を割り込んだ。

10 月に入ると、米国経済は 8 月の建設支出が 2008 年 5 月以来の高水準となった一方で、9 月非農業部門雇用者数は市場予想を下回り、失業率も 5.1%で横ばいであった。加えて、9 月の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で米連邦準備制度理事会(FRB)は利上げに慎重な姿勢を示した。これを受けてドルが軟化し、ベースメタル相場を押し上げた。

9 日にはグレンコアが亜鉛を 500 千t減産すると発表し、この日の亜鉛相場は\$162 急伸した。これは同社の亜鉛生産の 1/3に相当し、2015 年第 4 四半期の生産は 100 千t減少することになる。

しかし、後半のベースメタル相場は中国の景気減速が失望されて反落に転じた。

中国の第 3 四半期 GDP 成長率は前年同期比 6.9%と 2009 年第 1 四半期以来の低水準となった。9 月の工業生産は 6 か月ぶり、1~9 月の固定資産投資は 2000 年 12 月以来の低い伸び率にとどまった。景気減速が鮮明となるなか、人民銀行は 23 日、貸出金利、預金金利並びに預金準備率の引き下げを発表した。利下げは昨年 11 月以降 6 回目。

月末にかけては米国の利上げ観測が再浮上した。FOMC は 28 日、政策金利を据え置いたが、9 月の声明にあった「世界的な経済・金融リスク」との表現を削除し、12 月の引き上げの可能性を示唆した。これを受け、翌 29 日のドルは対ユーロで 8 月以来のドル高水準となる\$1.10 割れへと上昇した。

供給障害要因としては、ジンクオックスリソーシズは 9 月 28 日、コリアリサイクリングプラント(韓国)の亜鉛原料として電炉ダスト(EAFD)の輸入を開始した。韓国内の鉄鋼メーカーの減産に伴う原料不足を補う。バーゼル条約に基づき 48 千t/年の EAFD の輸入が韓国政府に許可され、10 月に韓国に到着する見通し。

需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015 年 1~8 月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比 2.9%増の 9,056 千t、地金生産は 6.4%増の 9,327 千t、消費は 1.1%増の 9,153 千t、地金需給バランスは前年同期の▲290 千tから+174 千tの供給過剰に転じている。

鉱石生産はアジアが 4.7%、オセアニアは 10.1%、ヨーロッパは 1.2%増加、アメリカは 1.3%、アフリカは 11.0%減少した。地金生産はアジアが 9.9%、アメリカは 2.0%、ヨーロッパは 1.0%増加、オセアニアは横ばい、アフリカは 34.7%減少した。消費はアジアが 1.2%、アフリカは 9.9%増加、アメリカ、ヨーロッパは横ばい、オセアニアは 1.6%減少した。地金の報告在庫は前年同期比 11.7%減の 1,497 千t、在庫/消費比率は 6.4 週間から 5.4 週間に低下した。

中国は鉱石生産が前年同期比 2.3%増の 3,356 千t、地金生産は 11.3%増の 4,108 千t、亜鉛精鉱輸入は 61.6%増の 855 千t、地金のネット輸入は 59.7%減の 179 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 0.5%

増の 4,213 千tとなった。

今後の需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015 年の世界の亜鉛鉱石生産は 0.3%増の 13.55 百万t、2016 年は中国の増加が中国以外の 1.8%減少を相殺し 1.8%増の 13.80 百万tと予想される。2015 年はヒンダスタンジnkのランプラアグチャ鉱山が昨年完成したインドのほか、オーストラリア、中国、ペルー、ロシア、スウェーデンが増加し、ボリビア、カナダ、アイルランド、メキシコ、カザフスタン、ナミビア、トルコの減少を相殺する。2016 年は MMG のセンチュリー鉱山が今年 8 月に閉鎖されたオーストラリア、11 月にヴェダントのリシーン鉱山(生産能力 170 千t/年)が閉鎖されるアイルランドが減少する。なお、グレンコアが 10 月 9 日に発表した 500 千tの減産計画は加味されていない。

2015 年の精製亜鉛生産は 3.7%増の 13.99 百万tと予想される。国別にはカナダ、中国、インド、韓国が増加する。2016 年は韓国、メキシコ、ナミビアの増加がオランダ、タイ、日本の減産を相殺し 1.6%増の 14.21 百万tと予想される。

2015 年の精製亜鉛需要は前年比 1.1%増の 13.90 百万t、2016 年は 3.3%増の 14.37 百万tと予想される。中国の需要がめっき鋼板生産の増加を主因に 2015 年が 1.4%、2016 年は 4.9%増加することにより牽引される。米国は自動車、建設需要の増加により 2015 年は 1.9%、2016 年は 1.7%増加する。ヨーロッパは 2015 年が 1.4%、2016 年は 0.7%の増加にとどまる。このほか、インド、韓国、台湾、ベトナムが増加し、カナダ、日本は減少する。

この結果、2015 年の世界の精製亜鉛需給バランスは 88 千tの供給過剰となるが、2016 年は供給が中国以外の鉱石の減産により抑制されるため 152 千tの供給不足となる。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

9/1	268	9/7	262	9/10	268	2/10	301	9/15	262	9/25	244
10/1	250	10/7	247	10/13	271	10/16	265	10/21	259	11/2	253

10 月の亜鉛建値は月半ばまで堅調に推移、8 月以来の高値となったものの、その後は軟調に推移した。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2015 年 9 月分=平成 27 年 9 月分)

生産	: 42,961t	(前月比 8.2%増、前年比 12.4%減)
出荷	: 48,146t	(前月比 6.8%増、前年比 2.0%減)
在庫	: 71,870t	(前月比 6.7%減、前年比 21.7%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

9 月の生産は八戸、神岡両製錬所の定修と播磨事業所の生産停止により、前年

同月比減となるも、前月比は飯島、安中両製錬所の定修明けから、6 か月ぶりの増となった。出荷はめっき関連がめっきメーカーの在庫調整完了により増加したため前月比増となったが、前年同月比は堅調だった昨年レベルには届かず、2 か月連続の減少となった。在庫は前月比で3 か月連続の減少だが、前年同月比は13 か月連続の増。

3. 需要部門動向

9月の鋳工業生産指数は前月比1.0%増、前年同月比0.9%減の97.3(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は3か月ぶりのプラス、前年同月比は2か月連続のマイナス。足許の販売が好調な化粧品やスマートフォン向け電子部品が貢献した。経産省は「弱含んでいる」から「一進一退で推移している」に基調判断を変更した。

7～9月期は前期比1.3%低下となり、2期連続の減となった。

9月の生産指数は15業種のうち8業種が前月から上昇し、7業種が低下した。化粧品などの化学工業が前月比5.4%上昇、電子部品・デバイスも同6.0%上昇した。一方、はん用・生産用・業務用機械は同4.8%低下した。

出荷指数は前月比1.3%増の96.7と3か月ぶりに上昇したが、前年同月比は1.6%減と2か月ぶりにマイナスとなった。一方、在庫指数は前月比0.4%減の113.5と再び低下に転じた。在庫率指数は同2.9%減の115.8。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、10月が前月比4.1%の上昇、11月は同0.3%の低下を見込んでいる。

8月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は前年同月比14か月連続の減と依然低迷。数量も11か月連続の100万t台割れ。再び90万t台へ低下。

8月の伸銅品生産量は54,513t(確報値、対前年同月比▲8.4%) (対前月比▲17.0%)。4月から実質的に5か月連続の対前年比マイナス。7月に比べマイナス幅は拡大した(7月▲6.8%、8月▲8.4%)。単月としてはリーマンショック後の回復期にあたる2009年(平成21年)5月(48,453t)以来、8月対比では1975年(昭和50年)8月(48,523t)以来の低水準となった。主要品種のうち銅条、黄銅条、銅管は対前年比マイナスが続いているが、黄銅棒は±0%となった。

黄銅製品では、黄銅条が6,677t(速報値、以下同じ)。対前年比は5か月の減少(▲11.6%)、2009年6月(6,665t)以来の水準。二桁マイナス(前年同月比、内需▲11.7%、輸出▲10.3%)。黄銅棒は13,402t、対前年比は13か月振りにマイナスから横這いに転じた(7月▲7.3%→8月±0)。稼働日の少ない8月のため対前月比は減少(前年同月比、内需▲0.2%、輸出+3.3%)。

亜鉛関連製品生産統計

		7月	8月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	942,840	867,352
	前年同月比(%)	97.7	89.4
黄銅製品	数量(t)	27,861	23,425
	前年同月比(%)	93.7	95.2
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,865	1,463
	前年同月比(%)	100.3	102.2
亜鉛華	数量(t)	5,689	3,348
	前年同月比(%)	108.2	93.6

(出所:経済産業省生産動態統計調査)